

(大阪東南部)

大阪・大坂城跡

おおさかじょう

所在地

大阪市中央区大手前三丁目

調査期間 一九九九年（平11）一月～一月

発掘機関 財大阪府文化財調査研究センター

調査担当者 江浦洋・本田奈都子・小林和美

遺跡の種類 城下町跡・城郭跡

6 遺跡の年代 一六世紀末～一七世紀初頭
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、大阪府警察本部の新庁舎建設工事に伴うものであり、調査面積は約三五〇〇m²である。調査地は豊臣秀吉が晩年に構築した三の丸に該当し、周辺部

の調査でも、当センターが一九九〇年度より実施している大阪府庁舎周辺整備事業に伴う調査で、古代から現代に至るまでの遺構・遺物が検出されている。

今回の調査では、南部は徳川期の大坂城築城によ

つて大きく削平されていたが、北半部では東西方向にのびる谷の存在が明らかとなつた。谷は北側の肩が調査区外にあり不明であるが、幅三〇m以上、現地表面から豊臣期の遺構面までの深さが三～六mを測る。谷部は徳川期大坂城築城の大規模な盛土によって埋められたため、豊臣期の遺構・遺物が良好な状態で遺存していた。

主な遺構としては、礎石建物や竈・井戸などの屋敷地に伴うものを検出し、遺物は木簡のほか、陶磁器・木製品・金属製品・錢貨・金箔瓦など多岐にわたるものが出土している。

木簡は北半部の谷で検出した屋敷地に関連する遺構および包含層から六九点出土している。そのうち文字の不明瞭なもの、絵画とみられるものを除いた一四点について今回報告する。

木簡のうち遺構から出土したものは四点である。これらの遺構の中には、トリベや羽口、木製品が出土している遺構（トリベ集積遺構四九一）や、炭を大量に含み、木製品や金属製品が出土している遺構（土坑四八一）が含まれている。この二つの遺構は谷の肩部に位置しており、徳川期大坂城築城の際の削平を免れたものである。

8 木簡の釈文・内容

土器溜まり六二九

(1) 「へはな へにや

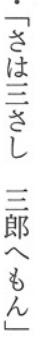
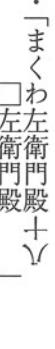
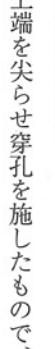
助右衛門」

□□

・「へ

」

トロベ集積遺構四九一

- (9) 「。申11月廿五日  刑マ右衛門」
45×28×4 051
- (10) 「。左衛門殿十之
「。よつ」
212×28×4 019
- (11) 「。おへね左衛門殿十之
「。左衛門殿」
117×(25)×2 081
- (12) 「。歩兵」
24×(14)×7 061
- (13) 「。桂馬」
27×21×7 061
- (14) 「。金」
32×27×10 061
- (1) は上下を切断し、左右に切り込みを入れた付札木簡である。切り込みの部分には紐をしばった痕跡が明瞭。物品の内容と送り先を表記したものであろう。
- (2) は上端を尖らせ穿孔を施したもので、右側を一部欠損している。
- (2) 「。早川」
45×28×4 051
- (3) 「。歩兵」
「。今カ」
「。ど」
26×20×9 061
- (4) 「。六十」
86×16×4 032
- (5) 「。舟木□□
「。」
(157)×(34)×9 039
- (6) 「。十一月^{廿八日} 左衛門
「。たるかす五千七百井入」
129×28×6 011
- (7) 「。酒生[酒生」
「。並松新九郎
「。入」
(88)×(23)×5 081
- (8) (107)×24×3 019

1999年出土の木簡



(7)



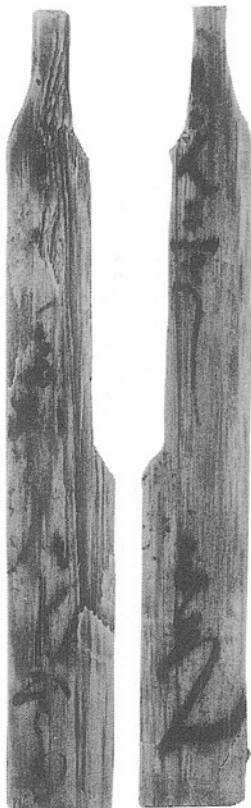
(6)



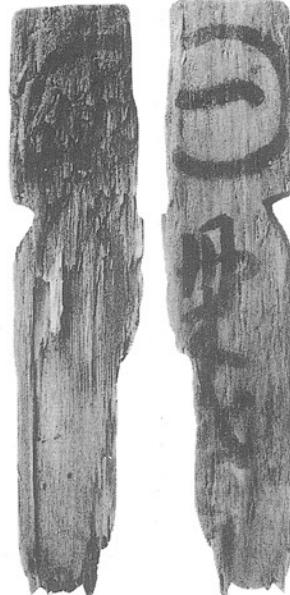
(4)



(1)表



(8)



(10)

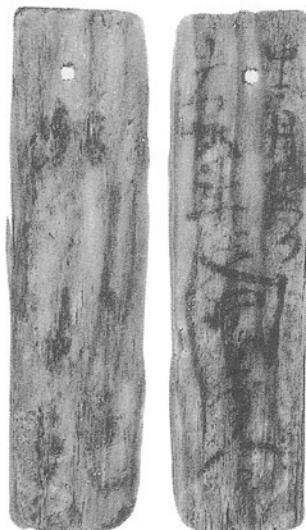
表面は人名を表記している可能性が高い。

(3)は将棋の駒であり、上部を尖らせた五角形をしている。下部が最も厚い。表裏ともに漆で書写しており、書体などから水無瀬駒である可能性が高い。

(4)は左右に切り込みを入れる付札木簡。表面のみに墨書がみられ、品名を記さず数量のみを表記している。

(5)は左右に切り込みを入れている付札木簡と考えられるが、左側および裏面、下端を欠損しているため、本来の形状は不明瞭だが、上部には屋号を下部には品名を表記しているものと思われる。

(6)は上下を整形して穿孔を施す付札木簡。表裏両面に墨書が認められるが、裏面は一部削られているために不明瞭。だが同じ内容を記述している可能性が高い。「たるかす」は酒樽の数を示すものと



(9)



(11)

思われる。表記されている月日と数量から、新年に用いられる祝い樽の個数を示す可能性がある。

(7)は左側と下端を欠損している。上部に穿孔を施しており、付札木簡と考えられる。表面のみ墨書が認められ、品名を表記している。

(8)は下端を欠損しているもので、左端に穿孔を施している。表裏に墨書が認められるが、裏面は剥離しており、文字は不明瞭。表面は人名を記している。穿孔の位置も含めて用途は不明である。

(9)は左右を欠損しており、上部分に穿孔を施している。「申三月廿五日」は年月日を表しており、豊臣期大坂城城下町の存続時期で申年に該当するのは、天正一二年（一五八四）、慶長元年（一五九六）、慶長一三年（一六〇八）がある。

(10)は左側上部が欠損しているが、表面の表記が完結していること

から、右側上部と同様な形状をしている可能性が高い。裏面の墨書は不明瞭であるが、残存している表記より、物品の授受に伴う木簡と考えられる。

(11)は右上部を面取りした板状のもので、左側を欠損している。裏面は同じ文字列が二行並び、表裏ともに天地を反転させた文字がある点から、習書木簡の可能性が高い。

(12)は将棋の駒。左右を欠損しており、下部が最も厚い。表裏ともに漆書であり、書体や文字が肉厚であることなどから水無瀬駒である可能性が高い。

(13)は将棋の駒。長方形の平面形態をなし、厚さは一定である。表裏ともに墨書があるが、墨痕が薄れており不明瞭。

(14)は将棋の駒。上部を尖らせた五角形であり、下部が最も厚い。

表裏ともに漆で書写しており、文字は肉厚である。書体などから水無瀬駒である可能性が高い。

なお、木簡の釈読にあたっては、大澤研一・八木滋（大阪市立博物館）、古市晃（財大阪市文化財協会）、小泉信吾の各氏にご教示・ご協力をいただいた。

9 関係文献

（財）大阪府文化財調査研究センター「難波宮跡北西の調査—大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う大坂城跡（その6）発掘調査速報」（二〇〇〇年）

（本田奈都子・小林和美）

京都・浅後谷南遺跡で木簡状木製品出土

本遺跡は竹野郡網野町字公庄に所在し、日本海に注ぐ福田川の東岸丘陵裾部に営まれた集落遺跡である。河口部まで現状では約4kmを測るが、昭和初期の埋め立て以前は、遺跡近辺まで渴が迫り、中郡盆地へ通じる要衝の地であつたと考えられる。

調査の結果、弥生時代から中世に至る遺構・遺物を多数検出した。特に古墳時代初頭から中期にかけての溝からは、多量の木製品や土器が出土している。

奈良時代から中世にかけては、掘立柱建物群・溝五条などを検出した。溝内からは墨書土器三点・綠釉陶器・輸入陶磁器・瓦など、一二世紀頃の遺物とともに、木簡状木製品が出土した。木簡状木製品は長さ二六三mm幅二五mm厚さ五mm、両端に切り込みを持つ〇三一型式だが、墨痕は認められなかつた。その他、包含層・土坑から円面鏡や八稜鏡などが出土しており、九世紀から一二世紀にかけて公的施設が存在したことを窺わせる。

（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府遺跡調査概報」第
九三冊 二〇〇〇年 参照）

（水谷壽克）